「日々の理科」（第 2187 号） 2020,-7,-5

「モミジの生命力（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

樹木はそれぞれの種（しゅ）が、さまざまな方法でその生命力を主張している。

これは大学構内にあるモミジの木だ。モミジといえば、すぐに秋の紅葉を思い浮かべる。しかし、モミジにもちゃんと花を咲かせるし、数え切れないほどたくさんの実（果実）をつける。

モミジの実は「翼果」と呼ばれる独特の形状で、枝から落ちると、竹とんぼのように回転しながら遠くに飛ぶ。いわゆる「フライング・シード」の一種である。

地面に落ちた種子は、意外にも発芽率が良い。春になると、モミジの木の下には「モミジの赤ちゃん」がたくさん芽吹いているのがわかる。持ち帰って、鉢や牛乳パックに土を入れて植えれば、成長を観察できるし、うまく育てれば庭木になるほど大きくなる。私は実際に小さなモミジの芽を、庭木になるまで育てたことがある。

モミジの仲間は、剪定（せんてい）にも強い。今年の早春に、山荘庭の駐車場の邪魔になっていたモミジ掘り起こした。枝を全て落とし、しかも根もほとんど切って掘り起こした。そのまま捨ててしまう予定だったが、実験的に別の場所に植え替えてみた。見た目は単なる「地面に立てた棒」だった。「強剪定」どころではなく「全剪定」である。私はさすがに、樹はすぐに枯死するだろうと予想していた。

しかし予想ははずれた。幹の何カ所からあっという間に小枝を伸ばし、ちゃんと葉を茂らせている。植物は心臓を持たないので、葉からの蒸散作用がなければ、根からの水分・養分を吸い上げられない。サバイバル優先で、まずは葉にエネルギーを集中したのだろう。